

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370800

研究課題名(和文) 近世日本におけるキリシタン禁制政策と異端的宗教活動の横断的研究

研究課題名(英文) The study of the prohibition against Christianity and the heterodox religious activities in the early modern age of Japan

研究代表者

大橋 幸泰 (OHASHI, Yukihiro)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：30386544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世日本のキリシタン禁制政策が当該期の人びとにとってどのような意味を持ったのか、という問題を追究したものであった。当該期の治者にとってあやしげな宗教活動を横断的に注目し、異端的宗教活動という枠組みの有効性を確認することができた。また、18世紀から19世紀にかけてキリシタン禁制の内実が変化していった様子を明らかにするとともに、属性論という新しい視座の有効性に気づいたことも重要な成果である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to consider the influence of the prohibition against Christianity in the early modern age of Japan. I could recognize the usefulness of establishing a category of the heterodox religious activities, which the rulers regarded as suspicious. I also explained how the focus of the policy against Christianity shifted from the 18th century to the 19th century. In addition, I introduced the benefits of applying a new method that I call the theory of attributes.

研究分野：日本近世史

キーワード：異端的宗教活動 潜伏キリシタン 隠し念仏 隠れ念仏 キリシタン禁制

1. 研究開始当初の背景

近年、宗教をめぐる問題は歴史研究にとって欠かせない材料となっている。その認識は、1990年代以降、発展史観による歴史像が説得力を持たなくなったのと引き替えに顕著になった。筆者も、このような研究動向のなかで議論に参加し、宗教に注目して日本近世史像の再構築を目指してきた一人である。特に、近世国家が徹底して排除しようとした「切支丹」をめぐる問題を材料に、キリシタン禁制の矛盾を検討してきた。

筆者の研究では、厳格なキリシタン禁制は、潜伏キリシタンの世俗秩序への埋没を促すとともに、「切支丹」イメージの貧困化をもたらしたと指摘し、その結果、治者から見て怪しげだとされる宗教活動と「切支丹」との間は判別が困難になったとした。そして、世俗秩序に埋没している潜伏キリシタンが許容される一方で、世俗秩序を動揺させる可能性があるときみなされた怪しげな宗教活動の規制が強められるという結果を招いたとした。

本研究は、このような筆者の研究成果のうえに立って、治者から見て怪しげだとされる宗教活動を横断的に捉えたうえで、それらの宗教活動とキリシタン禁制政策との関係を考えることを目指した。

2. 研究の目的

キリシタン禁制政策のもとで潜伏状態にあったキリシタンや、本山から異端視された隠し念仏などのような、治者から見て怪しげな宗教活動は、史料上「異宗」「異法」と呼ばれた。そこで本研究では、「異宗」「異法」などと呼ばれる宗教活動を個別に扱うのではなく、これを横断的に異端的宗教活動という概念で捉えた。総じていえば、本研究は、この異端的宗教活動をめぐる問題の検討を通じて、近世人の秩序意識について明らかにしようとするものであった。

この研究を進めていくにあたり、当面の課題として次の二つの問題を設定した。

第一は、実際の潜伏キリシタンと近世国家が徹底して排除しようとした「切支丹」との分離、および、その「切支丹」と異端的宗教活動との混同がいかなる経緯で進行したのかという点である。キリシタン禁制の内実が、どのような経過を経て変化していったのかを精緻に検証する。

第二は、キリシタン禁制の内実の変化によって、キリシタン禁制を基軸とした近世秩序がどのように解体し、近代秩序に移行していったのかという点である。19世紀に登場した民衆宗教を視野に入れ、近世から近代への転換の意味を、異端的宗教活動を軸足に検証する。

本研究は、以上の課題を通じて、近世日本における異端的宗教活動という新たな視点

から、近世・近代移行期における秩序の転換の歴史的意味について明らかにする試みであった。

3. 研究の方法

従来の研究では、潜伏キリシタンを含む異端的宗教活動をめぐる問題は、それぞれ別個に扱われてきた。キリシタンはキリシタン研究、民間信仰・流行神は民俗宗教研究、隠し念仏・隠れ念仏は浄土真宗研究、不受不施派は日蓮宗研究、19世紀の新たな宗教動向は民衆宗教研究、などというようにである。

しかし、キリシタン禁制の内実の変化をふまえて考えると、これらを縦割り式に扱うのでは近世の諸宗教相互の関係が見失われてしまう。本研究は、潜伏キリシタンを含め、上記のような近世日本の異端的宗教活動を横断的に検討することによって、近世人固有の秩序意識を考えることができるという見通しのもとに行われた。これは、異端的宗教活動を軸足に近世宗教を総体としてとらえようとする試みでもあった。

本研究が提起した新しい方法は、従来縦割り式に検討されてきた諸宗教活動を異端的宗教活動として概念化し、横断的に検討しようとするところにあった。もちろん、異端的宗教活動はそれぞれ独自の個性をもっているのはいうまでもないが、既存秩序を保とうとする勢力の側から怪しげな活動として常に警戒される点で共通の性格を持っている。その共通性に注目しようというのが新しい点であった。

具体的な研究対象は多岐にわたるが、本研究ではさしあたり、潜伏キリシタンと隠し念仏・隠れ念仏に重点を置いた。筆者がこれまで取り組んできた潜伏キリシタンに加えて、特に、浄土真宗の異端に注目したのは、近世期を通じてもっとも異端が問題とされるのは真宗であり、特定の地域にだけ起きたというのではなく、どこにでもその可能性があったからである。また、真宗の本山から弾圧されるケースの他に、権力からは弾圧されるが、本山からは保護されるというケースもある。真宗を禁止した鹿児島藩・人吉藩における隠れ念仏がそれである。このように、権力・地域社会と異端的宗教活動との関係を見ていくうえで、真宗の異端は、豊富な事例を提供してくれる。

近世期を通じて、潜伏キリシタン、隠し念仏・隠れ念仏がともに存在するという意味で、もっとも注目されるのは九州地域である。そこで、本研究では、長崎・佐賀・熊本・鹿児島に調査に出かけ、史料を収集した。

4. 研究成果

(1) 方法論としての成果

方法論としての成果としては、異端的宗教活動という横断的なカテゴリーと、属性論と

いう新しい視座の有効性を確認することができたことをあげたい。

異端的宗教活動というカテゴリーの有効性については、次のようにいうことができる。18世紀以降、「切支丹」ではないが、治者の側から見て警戒すべき宗教活動（現実の潜伏キリシタンも含む）が、おおむね「異宗」「異法」「異説」「奇怪」などと表記されたことは既に述べた。それは既存宗派の異端や民間信仰を対象とするものであり、キリシタンもその範疇のものとして扱われたが、その意味するところは「切支丹」のような「邪」ではないが、「正」ともいえないということであった。いずれにしる近世中後期に展開するこれらの宗教問題は、異端的宗教活動をめぐる一連の動向として横断的に理解するほうが史実に近づけるといえる。

属性論の有効性については、次のようにいうことができる。複数の属性をあわせ持ち、ときには矛盾する属性の間で苦悩するのはすべての人々に共通する現象である。歴史事象の意味を史実に沿って位置づけようとするとき、過去も現在も、そして未来に生きる人々もみな複数の属性を持っていることを前提に、検討対象の人々がどの属性の立場を優先したかを考えることが重要である。個人でも集団でも、単一の属性だけでは成り立っていないことをより意識しようとする属性論は、史実に接近するのに有効な方法であると考えられる。たとえば、潜伏キリシタンの場合、村請制の仕組みのなかで生きる近世百姓としての属性を並立させ、ときには優先させて踏絵を踏んだり檀那寺の活動を行ったりしていたことが、潜伏が可能であったのもっとも大きな要因であると結論づけられる。

（2）内容上の成果

内容上の成果としては、近世人の「邪正」観を明らかにしたことをあげたい。

内面の信心という内在的属性を保持していた異端的宗教活動を実践する人々にとっては、宗門改で確定される公的な外在的属性のほかに、その内面の信心が周囲（治者）からどのように見られていたかというもう一つの外在的属性があった。このような重層的な宗教的属性のなかで、近世の治者にとって、秩序を維持するための手段が公的な外在的属性を管理することであったといえる。

そして、宗門改で確定された檀那寺の宗派という公的な外在的属性のほかに別の宗教的属性を持っていたとしても、近世治者の基本姿勢は、外在的属性が「邪」でなければ、内在的属性に踏み込まないというものであった。その背景には、明快な「邪」と曖昧な「正」という対照的な「邪正」の感覚が存在した。近世日本では「邪」の宗教とは「切支丹」のことであったが、「正」の宗教が指定されたことはなかった。このような条件のもとで、重層的な属性の曖昧性が保たれていたのが近世という時代である。

こうした「邪正」の感覚は幕末まで保たれていたと思われるが、もちろん幕末にいたるまで何も変化がなかったのではない。近世後期、怪しげなものは何でも「切支丹」的なものとしてとらえられる、「邪」の曖昧化が進行するとともに、秩序を維持しようとする治者の側の姿勢にも変化が生じていった。治者にとって内在的属性が怪しげなものであった場合、それも含めて「正」の属性に近づけるべきだとする志向の萌芽を、18世紀中後期以降19世紀中期にかけて、断続的に展開した異端的宗教活動をめぐる事件に見ることが出来る。

今後は、本研究では扱えなかった日蓮宗不受不施・三鳥派、御蔵門徒、富士講など、異端的宗教活動の検討対象を広げていく。その際、19世紀における民衆宗教の登場との関係をより意識したい。また、属性論という視座を深化させ、その有効性を学界にアピールしたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

・大橋幸泰「異端と属性 キリシタンと「切支丹」の認識論」(歴史学研究会編『歴史学研究』912、p.14-26、2013年11月)査読無(ただし依頼原稿)

・大橋幸泰「幕末期における異端的宗教活動の摘発 対馬藩田代領「新後生」の場合」(『早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)』63、p.35-49、2015年3月)査読無

・大橋幸泰「近世日本の異端的宗教活動と宗教的属性 潜伏キリシタンと隠れ/隠し念仏」(歴史学研究会編『歴史学研究』941、p.13-21、2016年2月)査読無(ただし依頼原稿)

・大橋幸泰「16-19世紀日本におけるキリシタンの受容・禁制・潜伏」(国文学研究資料館編『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』12(通巻47)、p.123-134、2016年3月)査読無

〔学会発表〕(計4件)

・大橋幸泰「江戸時代、潜伏キリシタンはなぜ存続できたか？」(コレージュ・ド・フランス 日本学講演、2014年6月13日、パリ・フランス)

・大橋幸泰「近世日本の異端的宗教活動と信仰者の宗教的属性 潜伏キリシタン隠れ/隠し念仏」(歴史学研究会日本近世史・ヨーロッパ中近世史部会合同シンポジウム「宗派化とキリシタン禁制 日欧交流と宗教的秩序の形成」、2015年1月11日、東京経済大学)

・大橋幸泰「近世日本の「邪正」と異端的宗教活動」(京都大学人文科学研究所共同研究

班「日本宗教史の再構築」ワークショップ
「異端的宗教活動」の近世 キリシタン・かくれ念仏・民衆宗教」
、2015年7月11日、京都大学)

・大橋幸泰「16-19世紀日本におけるキリシタンの受容・禁制・潜伏」(「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in バチカン「キリシタンの跡をたどる バチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流」
、2015年9月12日、ローマ・イタリア)

〔図書〕(計2件)

・大橋幸泰『潜伏キリシタン 江戸時代の禁教政策と民衆』(講談社、2014年5月、全p.254)

・大橋幸泰「近世秩序における「邪」の揺らぎ ―「隠し/隠れ念仏」と「切支丹」(島藺進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教 近世から近代へ6 他者と境界』春秋社、p.21-49、2015年7月)

6. 研究組織

(1)研究代表者

大橋 幸泰 (OHASHI, Yukihiro)
早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授
研究者番号：30386544

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし